

第 17 回日本放射線安全管理学会学術大会 印象記

渡辺 賢一
Watanabe Kenichi

日本放射線安全管理学会の第 17 回学術大会が平成 30 年 12 月 5～7 日の 3 日間にわたり、名古屋大学の野依記念学術交流館にて開催されました。筆者も、大会運営スタッフの一員として学術大会に参加いたしました。

まず開会にあたり、学会長である中島 覚氏（広島大学自然科学研究支援開発センター教授）及び大会長の瓜谷 章氏（名古屋大学工学研究科教授）より開会あいさつがありました（写真 1）。

講演は 3 日間にわたりプログラムされており、2 会場に分かれて行われました。一般講演は、口頭発表のセッションが放射線計測、環境放射能、線量評価、廃棄物処理とクリアランス・安全管理、法理論・IRPA 活動報告、飛散率・透過率・汚染検査、教育方法といったテーマごとにプログラムされ計 10 セッションで 45 件の発表（写真 2）と、ポスターセッションにて 43 件の発表がありました。また、企画

セッションとして、予防規程、マニュアル改訂状況をテーマとしたセッションが、特別セッションとして、短半減期核種の放射線安全管理の現状と課題というテーマでパネルディスカッションが行われました。いくつかの代表的な施設・機関における現状の問題点等について意見交換がなされました。ポスターセッションは、できるだけ多くの方が参加できるよう他のセッションが行われていなかった 2 日目の夕方に実施され、会場では活発な議論が繰り広げられていました（写真 3）。

2 日目には招待講演として、CERN の Marco Silari 氏を招き、“Clearance from regulatory control of very weakly radioactive accelerator equipment at CERN” というタイトルで講演が行われました。スイスとフランスにまたがる CERN において、両国の規制に従いながらクリアランスを進めていくご苦労や、日本とのクリアランスに対する意識の違い等、大変興味深い講



写真 1 大会長による開会あいさつ



写真 2 一般講演時の会場内の様子

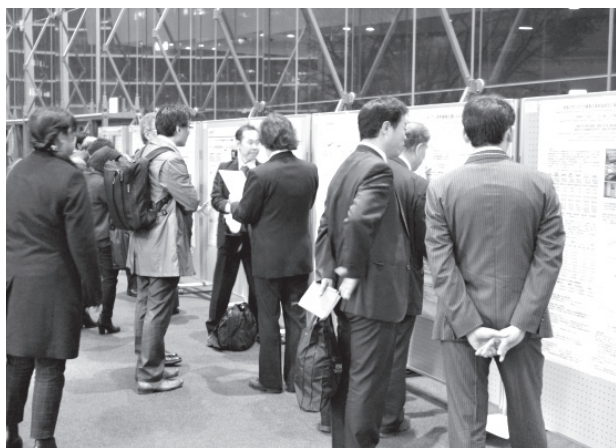


写真3 ポスターセッションの様子



写真5 大会賞授賞式の様子



写真4 招待講演の様子

演をいただきました（写真4）。

2日目の夜には懇親会が開催されました。今回は、サッポロビール名古屋ビール園浩養園にて、例年とは異なるスタイルとしてBBQスタイルで、ビールとジンギスカンを楽しみながら、お互いに意見交換を行いました。

最終日の3日目の最後には、各種表彰式が行われました（写真5）。研究奨励賞は、北海道大学の阿保憲史氏の「ホットセルに格納可能な小型RIガス貯留装置の開発」、大阪大学の前川達郎氏の「ゾルーゲル法によって調製されたホウ素含有 Al_2O_3 線量計の特性評価」が受賞し、それぞれ受賞記念講演が行われました。若手奨励金は、岡山大学の長田直之氏

の「加速器室内で生成する放射性エアロゾルの生成機構の解明」に対して贈られました。また、大会賞として、優秀プレゼンテーション賞をKEK 飯島和彦氏の「KEK 陽子加速器トンネルにおけるコンクリート壁・床の放射化」、東北大学 石井浩生氏の「リアルタイム個人線量計を用いたIVRスタッフの水晶体線量に関する基礎的検討」が、優秀ポスター賞を大阪大学 橋本泰一氏の「3-D プリントを用いた任意形状の線量計造形技術の開発」、兵庫医療大学 浦元沙和氏の「市販試薬を放射線源として利用した放射線教育の提案」、大阪大学 兼田加珠子氏の「動物実験における短寿命アルファ線核種の体内外の分布」がそれぞれ受賞されました。

学術大会終了後には、あいちシンクロトロン光センター及び名古屋大学アイソトープ総合センターの見学会が開催されました

学術大会全体の印象としては、各セッションは盛況で、活発な議論が繰り広げられ、当該分野の今後の益々の発展が期待されるものであったと感じられました。次回は、仙台にて日本保険物理学会と合同での学術大会が開催されますので、本稿の読者の皆様におかれましても、参加をご検討いただけますと幸いです。

（名古屋大学工学研究科）